

再発見・牛久第七話

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功

小川芋銭と中里介山②

(一)

みやこ文壇

芋銭子を訪ふ―介山

―明治44年6月2日より

5回都新聞に連載―

芋銭が、幸徳秋水、堺利彦らが発行する平民新聞に挿絵を投稿していた関係から、介山もはやくから芋銭に注目していたようだ。

介山は芋銭宅を明治44年(1911年)5月31日に訪問している。介山がその訪問記『芋銭子を訪ふ』を都新聞(現東京新聞)に同年6月2日より5回連載しているのだ、



みやこ文壇

芋銭子を訪ふ(一) 介山

五月の卅一日に、社中の小出健と打ち違れて、常陸国牛久村に、小川芋銭子を訪ねた。自分はネツと前から、芋銭子の畫風に傾倒し、折があつたらば、何か書いて貰いたいと思つて居た。小出君も其の希望があつた。そこで、ツイ先頭畫を飛ばして、頼んで、今日お訪ねするからと言つて置いた。夜來の雨が降れて、眺へ向きの上気

各回の主要部分を抜粋して次に記しておく。この年、芋銭43歳、介山は26歳であった。

社中の者を連れて、常陸国(まだ旧国名を使った人がいた)牛久村に芋銭子を訪ねた。午前6時に上野駅を発車して8時少し過ぎに牛久駅に着いた。(当時客車を蒸気機関車が引いていた)『絵を描く小川さんという人は何処でしょう』と尋ねながら、牛久の町を過ぎた。暢気に歩いて、朴訥な爺さんや、恥ずかしそうな田舎娘などに度々聞いて、芋銭宅に着いた。芋銭子の家は純然たる農家である。家の周囲は桑畑、馬鈴薯畑やらで、自分は芋銭家中の人となつた。痩せこけて、背の低い、顔の半分が髭だらけの芋銭子は、奥の方から出てきて余らを迎え、六畳の室に導いた。初対面やら、時候やらの挨拶があつて、やがて細君が乳呑児を抱えながら、茶と塩煎餅を運んできて、持て成してくれた。細君は今まで外で裸足で、農事を働いて居たものらしい。何処から何処まで田舎の農家に入った心持がして、画人らしいところが少しもない『稲敷郡養蚕組合員小川茂吉』という表札がよくすべてを説明するものだと思つた。

(二)

但し、芋銭子は土地の農民ではない。士族で、東京生まれの人である。この辺が牛久藩の領地で父祖以来開墾をやつて居た。その縁故で牛久村の住民となつた。一時は東京生活をやつて見たが、健康が許さない、脚気のような妙な病気にかかつて、それからこの牛久村に引込んだ。

(三)

こんな話が出た。芋銭子が幸徳秋水のために絵(平民新聞に寄稿)を書いていた。其の関係から大逆事件の際、出入りにお供(刑事がつく)がついた。或時東京の友を訪問すべく、牛久沼名産の尊菜の瓶を小脇にはさんで、汽車に乗り込むと突然その刑事から取調べを受けて、件の瓶を取り上げられた。爆発物でも入つて居りはせぬかとの疑いであつたらしい。：其のお陰で芋銭子の名が警察方面へ知れて、

(四)

芋銭には芋銭の天地(世界、宇宙)がある。：ナイフで削つても、石炭を焚いても出て来ない処がある。人のこの自得を小さしと言ふ勿れ、真に此の自得に達すればよく古今に独歩し得るであろう。

芋銭子は余の為に俳諧寺入道(小林一茶)の瘦蛙負けるな一茶是にありを描く可く約して、様々な話があつた。

芋銭子は其処まで送るといふて、麦藁帽子を被り、三人連れ立って牛久沼の方へ歩き出す。

(五)

やがて沼の畔の、とある一水亭に着いて沼で取れた、魚類や尊菜を肴にビールを抜いた。また、盛んに話し出す。やがて亭を辞し、芋銭子は、またわざわざ停車場まで送つて来てくれた。

都新聞提供は桜沢一昭氏



写真 晩年の中里介山(57歳) 信州・野尻湖畔 昭和17年7月撮影 中里介山と大菩薩峠(桜沢一昭著・同成社刊)より引用